

第2回 中国抗日根拠地史国際シンポジウム参加記 (1991年8月1日～4日)

〔目 次〕

- ①全体会報告 (開成高校) 三好 章
- ②第1分科会報告 (篠崎高校) 馬場 毅
- ③第2分科会報告 (大東文化大学) 内田知行
- ④第3分科会報告 (一橋大学) 佐藤 宏
- ⑤報告者と報告題目
- ⑥太行山中渉県参観記 馬場 毅

全体会報告

三好 章

1991年8月1日から4日間、宿舎となった天津科技大厦と南開大学を行き来しつつ第2回抗日根拠地史シンポジウムが開催された。全体のプログラムは別掲の通りであるが、ここでは、全体会の各報告についてその要点をкаいつまんで報告したい。

すでに、2～3日前から宿舎でエントリーを済ませていた参加者もあり、大会は8月1日午前9時、天津科技大厦1階の多目的ホールで予定通り始まった。まずは型どおりの開会式が40分ほどあり、名誉主席の母国光氏や天津市を代表して黄炎智氏、この大会の実質的な組織者を代表して魏宏運氏の挨拶があり、1984年以来7年ぶりの再会を喜び合った。そして、科技大厦前での記念撮影のち、ただちに報告が始められた。

この日の午前中、彭明氏を議長に最初の全体会

が持たれた。ここでは、当初全部で5本の報告が用意されていたが、報告者の交替もあり、実際に報告が行なわれたのは4本であった。まず、魏宏運氏から「遊撃戦推動了中国抗日戦争的歴史進程」と題しての報告があり、主に華北の抗日戦をとりあげて1937年8月の洛川会議が抗日遊撃戦の端緒となったことなどのほか、遊撃戦が日本の北進の力を奪い、太平洋戦争の開始を遅らせたことが述べられた。遊撃戦に抗日戦争の全体像を重ねている向きが感じられる報告であったが、抗日遊撃戦を第2次世界大戦の全体像の中に位置付けようとする試みは評価に値しよう。

つづいて、L. ビアンコ氏が“Peasant responses to the Communist Party mobilization policies in the anti-Japanese bases : some western views”を報告された。そこでは、抗日期の中共の政策は積極的に呼応しようとする農民大衆ではなく“elite”や「遊民」分子が担ったこと、多くの農民はナショナリズムからではなく即物的な物質刺激によって行動を起こしたこと、そして動員された農民も繁しにくいものであったこと、中共にとって農民との関係は維持することも強化することも困難ではあったが、中共はそれらを通して革命的役割の再建に成功したことなどを述べら

れた。根拠地をふくむ中国革命史の再検討の課題を提起された報告であった。

つぎに、王淇氏の「毛沢東論抗日根拠地」があった。そのなかで王淇氏は、抗日遊撃戦争の戦略的位置付けは敵後方を前線に変化させることにあったこと、後方を持たない遊撃隊には根拠地が不可欠であったこと、根拠地建設には政治的地理的問題ばかりか、強化する場合と発展させる場合とにそれぞれの矛盾を抱えていたことなどを述べた。従来のように毛沢東の議論を下敷にしているものの、その枠を守りながら、根拠地の内面を見ていこうとする姿勢が感じられた。

最後に三谷孝氏による「抗日戦争中の紅槍会」があった。ここでは、1930年代前半、なりをひそめていた中国史上最後の宗教結社としての紅槍会が、37年夏以降再び活発に活動しはじめ、中共と八路軍の工作で多くが八路軍に改変され、組織も改造されるなど成果をあげ得た対象となったことについて議論が展開された。日本軍の略奪者としての性格がはっきりする中で、中共が多方面での社会経済的変革を進めて紅槍会の社会的存立基盤そのものを弱体化したことなどが述べられた。また、38年の彭真による紅槍会の調査と、43年の新民会の調査とに共通点が多くあるとの興味深い指摘があった。

翌2日、午前中に鄭徳栄・L.P.パンスライク両氏を議長に全体会が持たれた。まず、馬斉彬氏による「中共在抗日民族戦線中の策略研究」があった。レジュメでは楊聖清氏と共同報告であったが、実際に報告したのは馬斉彬氏であった。敵と味方をはっきり見分け、具体的に分析し、団結と闘争を堅持したとの公式的見解にとどまったものであった。

つぎの王檜林氏は「抗日戦争有無戦略反攻問題」と題する報告を行なった。日本の降伏前、抗日戦争には戦略的反攻段階はなかったとするのが王檜

林氏の結論であった。戦略的反攻は日本の降伏後に行なわれたこと、それは、八路軍と八路軍への降伏を拒否した日本軍との戦いであったこと、そしてそれは中共と国民党の勝利の果実をめぐる戦いであったことが述べられた。これは、全体会のみならず、午後の各分科会やその後シンポジウムの期間中、中国人研究者の間で大きな話題となった。一方、日本人をふくむ外国人研究者は、ほとんど関心を示さなかった。しかしこれも、毛沢東の『持久戦論』のドグマとはちがった議論であり、それが展開できるだけ、中国の学界の風通しがよくなったと言えるのかもしれない。

つづいてG.ベントン氏による「新四軍的建立」であった。Benton氏は新四軍建設の多方面にわたる問題を、すでに“The Early Growth of the New Fourth Army”として著しており、現在刊行準備中である。その著書に従って、南方三年遊撃戦争からの改編過程を葉挺・項英・陳毅の動向、毛沢東の旧ソヴィエト区への観点などについて述べられた。

議長でもあったヴァンスライク氏は「彭徳懐と百団大戦」を報告した。ここでは、百団大戦は延安とは別に彭徳懐を中心に山西で決定され、延安に開始の了解をとらずに始められたこと、毛沢東もこれを高く評価していたが、日本軍が百団大戦への対抗策として「三光作戦」をとり始めるとその評価が変化したことを述べた。この報告でヴァンスライク氏は、抗日戦争期、中共の動きが分散的であり、地方の軍指揮官が大方針の中で大きな独立性を有していたとの新しい指摘をおこなっていた。

ついで、星光氏の報告は「中国抗日根拠地財政」であった。報告では、時期別の特徴として1937～39年には田賦・税・公糧の徴収と公債などの発行が主要任務となり、40～42年は大生産運動、43～45年は財政の好転が反攻の物質的条件をもたらしたことを述べ、財政の保証があつてはじめて抗日

戦争に勝利できたとした。常識的な結論ではあるが、段階別に抗日戦争期の財政問題を整理したところに新味があった。

グッドマン氏は、「太行山革命根拠地」を報告した。晉冀魯豫地区の抗日闘争は今回のシンポジウムのオプショナル＝ツアーの目的地についての報告でもあり、興味深く聞いた。

また、孫思白氏は「抗日戦争与民主政権」を報告した。ここでは、抗日根拠地の民主性が戦争に勝ち抜く原動力となったことが述べられていた。

さらに、議長を務めた鄭徳栄氏は「抗日戦争与毛沢東思想科学体系的形勢」を報告した。これも田克勤との共同報告であったが、実際に報告したのは鄭徳栄氏であった。抗日戦争期が中共の指導した新民主主義革命の特別な段階であり、この時期にこそ中共の勝利が確定的なものになったこと、この新民主主義革命の理論体系とそれが具現する観点、立場の形勢が毛沢東思想の科学的体系を示している、とするものであった。

さて、シンポジウム最終日の8月4日、朝から全体会が持たれた。午前の部は、南開大学誼園3階の大会議室で報告が行なわれた。まず、マーク・セルデン氏による“Why They Won Reflections on the Chinese Communist Party and the Peasantry”から始まった。報告は、抗日戦争における中国の勝利を、アジア・アフリカ・ラテン＝アメリカ諸国の第2次大戦後の反植民地闘争の象徴であり、そして起爆剤となったと20世紀の歴史過程の中に位置付け、第3世界諸国の多くで中国型革命路線がとられたことを指摘した。その際、人民戦争の時代における抵抗のあかしとしての社会経済的な、また政治的変革を手のとどくものとする革命根拠地建設の重要性と、中国革命の道において結果として形成された党と農民の間に埋め込まれた矛盾についてもあわせ指摘された。

つぎの王永祥氏は「論三三制政権」を報告した。

「三三制」が抗日戦争期に集中的に出現した意味を探り、これが抗戦中の中国政治の民主化に果たした具体的役割を評価することを課題としていた。現在の中国の民主化の掘って立つべき歴史的根拠を探るための報告に思えた。元邦建氏は「抗日戦争时期的香港」のなかで、日本占領下の香港で広東省東江人民抗日遊撃隊港九大隊が、イギリス軍にかわって日本軍との闘争を堅持し、香港に閉じ込められていた茅盾・鄒韜奮など800人以上を脱出させたり、日本軍に捕らえられていた外国人を救出したことを指摘した。

午後は、会場を再び科技大厦に移し、魏宏運氏・ジョセフ・W. エシェリック両氏を議長に4本の報告が行なわれた。最初に彭明氏が「關於延安抗大」を報告した。抗日戦争期の延安抗日軍政大学についての研究と思いで話がない交ぜになり、彭明氏は最後には当時の軍歌を歌って報告を終えた。つぎの李光一氏の報告は「抗戦时期中共与各民主党派団結合作的民主憲政運動」と題するものであった。そこでは、この運動が抗戦の対峙段階に生まれ、国民党が1940年11月12日に開催した国民大会がそのきっかけであり、独裁の国民党に民主憲政を迫る運動が中共と各民主諸党派との協力により展開されたこと、それが中国社会主义建設にとって偉大なる貢献であったことが述べられた。また、陳瑞雲氏は「抗戦时期的兩種政權建設」と題して、抗日民主政權が民主主義と清潔な政府のモデルであったことを、国民党統治区と中共の抗日民主政府との比較を通じて述べられた。最後に、馮崇義氏が「愛国主義思潮与根拠地建立」で抗日戦争期の中国ナショナリズム形成について報告した。

全体の報告が終った後、各分科会からの報告があり、シンポジウム全体に関する総括が述べられ、シンポジウムを締めくくった。

もはや紙数も尽きたが、今回のシンポジウムは前回にくらべかなり闊達な議論が展開されたこと、

経済史をテーマとする報告の中で、「減租減息」についてのものが全く姿を消したことが、「改革と開放」のなかでの農業の非集団化を推し進める中国の現実と、照応するかのように、目についた。また、1989年の「六四」事件以来の民主化に関わる動きも微妙に影を落していた。

第1分科会報告
「毛沢東思想と抗日根拠地の形成」

馬場 毅

第1分科会は「毛沢東思想と抗日根拠地の形成」をテーマにして報告が行われた。ただ毛沢東思想そのものを取り扱った報告は少数であり各報告の内容は、(1)抗日根拠地について、(2)根拠地思想について、(3)その他に分けられる。

(1)抗日根拠地について

ジョセフ・W・エシェリック報告は、陝甘寧辺区を研究するにあたって、自分や西側の歴史家は、中国革命がどうして成功できたかに最も関心があるが、中国の歴史家は中国革命がどうして成功したかに関心がなく、解決しようとしている問題は、共産党がどのように正確な戦略と路線を制定して勝利を勝ち取ったかということであり、その結果、党史研究の主要な研究は党内の路線闘争であり、毛沢東の正しい路線がどのようにして勝利し、誤った路線がどのようにして失敗したかを証明することであると、文革の時に典型的に現れた中国における「2つの路線闘争」研究を鋭く批判する。その上で、アメリカにおける中国革命がなぜ成功することができたか、とりわけなぜ中共が農民を動員することができたかという点についての研究を以下のように整理する。チャルマーズ・ジョンソン氏は、抗日戦争こそが北方の農民を動員することができ、中共は農民の抗日ナショナリズムの支

援により政権を奪取したと、農民の抗日ナショナリズムを重視し、マーク・セルデン氏は、農民を動員することができたのは、農民の政治参加と土地の分配だという点を強調したとし、カタオカ・テツヤ氏は、抗日愛国より中共の社会面と経済面の改良（例えば累進税等）を重視し、陳永発氏は、中共は農民を動員するにあたってその土地の具体的状況に応じて自己の政策を調整し、各種の利用できる要素を利用したのだとし、ジョセフ・W・エシェリック氏自身は、最近の陝北農民への調査によって、農民が革命に参加した動機として、個人の権力への欲望が挙げられる、とする。エシェリック報告は従来の中国における抗日根拠地についての研究方法を鋭く批判するとともに、アメリカにおける抗日根拠地研究を手際良く整理し、自らの創見も加えてなかなか刺激的であった。

エリス・A・ディヴィディオ報告は、抗日戦争開始前後の1936年から1942年にかけての山東省の共産党の再建と抗日戦争の指導を通じての党組織の強大化の問題をとりあげた。この報告は最近中国で発表された大量の資料を用いた実証的なものであり、最終日の総括報告でも何人かの論者が言及して若手の注目すべき成果として激賞した。黄小同報告は、従来とりあげられることのあまり無かった平津の地下党と晋察冀を主とする華北抗日根拠地との関係を取りあげた。また文革の時に、王明との関係で指導者の項英が批判されたため研究の行われなかった新四軍と華中根拠地についての研究が最近盛んになっているが、新四軍研究を主導している一人である馬洪武氏の報告は、華中抗日根拠地の歴史的立場を総論的にとりあげた。R・サクストン報告は、冀魯豫省境における1910年代からの民衆蜂起の動きと30年代の共産党政権との関連についてとりあげた。傅希忠報告は、シンポジウム終了後、参観が予定されていた太行山中の河北省涉県（晋冀魯豫政府の所在地）の抗日戦争の紹介であった。李恩民報告は、従来あまり